

# 続・ 珈琲の思い出 20

鈴木優子

「もし良かったら今度お食事でもご一緒にいかがですか？」という誘いのメールに対して、優子から「ぜひ、よろこんで！」という返事がすぐさま返ってきたのを見て、

和樹はもう胸の高鳴りをおさえることができなかった。

マンションのドアの前で一つ深呼吸をすると、ドアを開けた。

「おかえり〜お父ちゃん！」息子の佑樹が飛びついてきたのを軽くいなしながら、台所のテーブルにつく。

テーブルの上には佑樹の好物のコロッケが並んでいたが、和樹は何だか胸がいつばいでもう食べる気はしなかった。

食欲のあまりない和樹を見て、妻の敏恵が詰問口調で言った。

「ちよつと、あなた！何だか食欲ないじゃないの？」

「いや、そんなことはないんだけど・・・。」

「何よ、晩ご飯が要らない時は早めに連絡してつていつも言ってるでしょ！？こつちだつて、準備するの大変なんだからっ！」

いかにも出来合いのコロッケを電子レンジで温めただけのような夕食を眺めながら、和樹は先ほどの優子とのプチデートのことを思い出していた。あの、ニコニコかわいらしい優子が今、目の前にいればいいのに。どうして、僕はこんな年増のガミガミ女と一緒にいるんだろう？？

そう思うと、ますます食欲がなくなつて、和樹はあいた皿を流しにもつていくと、早々に風呂に入つて自室にこもつた。(続く)